昭和二十二年

茎立の葉かげ重ねて昼深し

岩がまの崩るゝ道や木の芽萌ゆ

揺れやまず山吹たわむ渓しぶき

堀り残す独活の芽立ちや別れ霜

葱坊主喜雨のすずろにそそぎけり

音もなく春ゆく川の水ゆたか

雨後の道高這う蟹に虹あかり

朝虹や露ふりこぼす花茨

七夕竹深夜の風にひそと鳴る

星祭了えし雲漢夜々に澄む

濯ぎ水草に溢れて虹明り

暮れて尚明るき夏至の外仕事

奥岳の郭公ひびく泉かな

刈り麦を夏至の日照雨（ソバエ）の鳴らしすぐ

湧口の草かきわけて泉汲む

冬凪や柿剪定の鋏冴え

蝶は凍て枳殻垣は刺固し

柩かく素草鞋に踏む冬の草

雪残る大巌めぐる水ゆたか

雪残る峯を背（ソビラ）に遭難碑

富士晴れて雪解の樹海鳶舞える

ダムを抱く疎林雪解の風通う

小鳥篭軒に吊るして野は雪解

織り励む姑（ハハ）の筬（ハタオト）音麦を踏む

鳶低く傾き流るる南風の畑

もの蔭に野良の茶すする薄暑かな

雲雀きく茶うけの砂糖手の窪に

砂浴びる雛に桃散る遅日光

春祭若草に坐し神楽みる

世話人の古紋服や春祭

春祭了えてぬくとき雨となる

晩春の野川に洗う蚕具かな

畑薄暑蒔く人参の種子匂う

早乙女の西日に笠を並べけり

棚経の僧に逃げこむ裸かな

大旱の暑気衰えず秋立ちぬ

魚板鳴る寺苑明るく春の雨

雨ぬくく雪解の端山雲まとう

花売りに娘と蜜蜂来ては去る